

星野君の二墨打の別府さんとその妻

くるみざわしん

登場人物

別府聡	52歳	夫
別府美樹	50歳	妻

一景

夏の夕。

六時を過ぎて、ようやく陽が陰り始めた。
まだ蝉が鳴いている。

別府家のリビング。

窓から夕の光。

電灯もつけず、ユニフォーム姿の聡が椅子に座っている。

テーブルにはコップ。麦茶が入っている。

冷蔵庫から出され、ポットからコップに注がれたが、テーブルに置かれたまま聡は口を付けていない。

聡、険しい顔で押し黙っている。

玄関のドアが開く。

美樹が帰ってきた。

美樹 ただいま。

美樹、リビングに入る。手にスーパーのビニール袋。

美樹 あれれ。

聡は黙っている。

美樹 なんなの。暗いまま。

美樹、電灯のスイッチを入れる。
明りがついた。

美樹、ビニール袋をテーブルに置いて、

美樹 いつ帰ったの。

聡は黙っている。

美樹 おめでどう。

聡は黙っている。

美樹 こういう時はやっぱり。

美樹、テーブルに置いたビニール袋から品物を取り出す。発泡スチロールのトレイに載り、ラップさされている。

美樹 お肉でしょ。グラム三百六十八円の和牛。この時間になるとヤマトヤは肉の値を下げるの。三十パー引き。二枚で千三百円しないのよ。うちのいなみ屋から自転車で片道八分、往復で十六分かかるけど、十六分で五百円安くなど時給にして約二千円。時給九百六十円で働く身のパートの主婦として当然の選択よ。ね。

聡は黙っている。

美樹 どうした。疲れてる。

聡、黙っている。

美樹 いい。いい。疲れてるよね、今日は。聞いた私がバカだった。

聡、黙っている。

美樹 お疲れ様。

聡、黙っている。

美樹 飲んだら、麦茶なんかやめて発泡酒。冷えてるわよ、冷蔵庫に。

聡、答えない。

美樹 さ、着替えよう。それ（ユニフォーム）脱いで。

聡 いや。

美樹 サラダも作るから。シャワー浴びといてよ。汗かいたでしょ。この暑さ。

聡 何がおめでどうなんだ。

美樹 え。

聡 俺の、何が。

美樹 それはあれよ。

聡 あれって。

美樹 勝ったでしょ。今日の地区予選。星野君の二塁打で。
聡 …。

美樹 伝わって来たのよ、試合結果。どういう経路なのかわかんないけど、四時前に。ラインやフェイスブックがあるからたいていのことはあれでね、すぐ。

聡、ユニフォームのボタンをはずす。首に近い、一番上のボタン。

美樹 星野君、あの子。ほっぺたぼっちゃりで目のクリッとした男の子。二塁でガッツポーズしている写真がね、一緒に流れてて、藤木さんが見せてくれたのよ、ホラホラって。あの人、仕事中でも平気でスマホ観るからさあ。いっつも注意されているのにやめない。ま、ピンセットでネタをつまんで機械が握ったスシ飯の上に置くだけだからね。片手で出来る仕事だから無理もないんだけど。私はしないよ。藤木さんと違ってスシネタから目を離すと落としたりちゃうからさ。あるものよね、人には何でも向き不向き。

聡は答えない。

美樹 藤木さん、知ってたのよ。あなたが監督だったこと。私、言ったことないし、あの人、野球なんて全然興味なさそうな顔してるのに。いやね、なんでも筒抜け、こころ。

聡、ユニフォームのボタンをはずす。

美樹 ヤマトヤで肉買って帰りなさいって言ってくれたのは黒田さんなのよ。知ってる、あなた、黒田さんの息子さんも小学生の頃、野球してたんだって、あなたのチームで。

聡 俺のチームじゃない。俺の前の前の監督の時だ。

美樹 で、黒田さん、口をすぼめていつも悲しそうな顔して

いるのに珍しく興奮しちゃってね、しゃべるしゃべる。出来が悪くて市立の東校しか行けなかったから息子の話なんかみんなの前でしたことなかったのに、どんだけ野球を頑張ったかを延々。一回戦負けばかりだったんだって、あなたのチーム。

聡 だから、それは俺の前の前の監督の時だ。

美樹 誉めてたよ、あなたのこと、たいしたもんだ。これは監督の別府さんのお手柄だって。

聡 …。(ボタンをはずしていた手が止まる)

美樹 藤木さんも丸山さんもそうだろうだ肉買って帰りなさい。今夜はお祝いしないとて言うから私その気になっちゃって、この暑いのにヤマトヤマまで自転車でひとつ走り。自分の店で買えばいいのにと思いうかもしれないけど、うちは肉がひどいのよ。半額でもいなみ屋で肉は買うなって有名。

聡 なにがどうお手柄なんだ。

美樹 え。

聡 黒田さん、言ったんだろ。これは監督の別府さんのお手柄だって。

美樹 それはあれよ。同点で迎えた九回裏ノーアウトランナ―一塁。普通なら送りバントなのにバントしないで星野君に好きに打たせた。その期待にこたえて星野君はセンターとライトの間を抜く二塁打。別府監督の采配、お見事。並みの監督なら手堅く送りバントだけ打つてではねえ。別府さんの旦那はさすがだよって黒田さんに誉められちゃって。ええまあ、うちのはただの工場労働者ですけど、野球に関しては一家言持ってますからって私、知りもしないのに自慢しちゃって。あはは(笑う)。

聡 俺はバントのサインを出したんだ。

美樹 え。

聡 送りバントのサインを出した。

美樹 え、あなたが、送りバントのサイン。

聡 そう。

美樹 じゃあ。

聡 あいつはそれを無視した。

美樹 あいつつてあの。

聡 星野君だ。

聡、ユニフォームの上着のボタンをはずそうとするが、怒りで手先が震え、ボタンをはずせない。

聡 ああああ（声をあげる）。

聡、無理やりユニフォームの上着を体から引きはがす。

ボタンが飛び、床に落ちる。

聡 二塁打打ったからっていい気になりやがって。

美樹 あなた。

聡 監督の俺のサインを無視したくせに。ガッツポーズなんかしやがって。ちくしろう。

聡、手に持っていたユニフォームの上着を床に叩きつける。

聡 何だ、あの、うれしそうな。

美樹 あなた。

聡 あんなもんがネットで広まってんのか。

美樹 ええ。

聡 ああああ（声をあげて）。許せん。ちくしろう。

美樹 でも勝ったんだから。

聡 なに。

美樹 そうでしょ。星野君の二塁打で勝って、決勝大会への進出が決まった。

聡 それが何だってんだ。俺は負けた。なめられたんだよ、あいつに。

美樹 …。

聡 誰のおかげでここまで勝ちのぼったと思ってるんだ。

美樹 それは。

聡 俺の力だ。監督の、この俺の。

美樹 …。

聡 端にも棒にもかからなかったんだぞ。俺が監督になるまで。毎年毎年一回戦負け。

美樹 …。（かける言葉がない）

聡 黒田さんの息子がいた頃の監督は三井。その前は大田。どっちも腰の曲がったシラガのよぼよぼだったからこの俺が見るに見かねて監督を引き受けてようやくここまで。この家に養子に入った俺が地区のためにできることといたらこのぐらいだ。世話になったお前の父さん母さんにもこれで少しは俺のこと見直してくれる。恩返しができると思っで一生涯懸命やってきた。知ってるだろ。俺がどれだけ、あいつら

のために。

美樹 そうね。この四年、ちゃんと土日は休み取って朝から晩まで野球野球。

聡 とことんやんなくちや勝てないんだよ、何だって。

美樹 わかるわよ。だからお祝いに肉を。

聡 めでたくない。

美樹 お父さんもお母さんも喜んでるよ、きつと、向こうで。

聡 喜んでるもんか。

美樹 …。

聡 あの二人だぞ。またバカにされてって、あきれてるよ。

美樹 でも。

聡 黙れ。こんな形で勝って何がめでたいんだ。俺を無視しやがって、あいつら。

美樹 あいつらって誰よ。

聡 うちのチームのガキどもだ。

美樹 星野君だけでしょ。あなたと無視したのは

聡 違う。二塁打打ってベンチに戻ってきた星野君に駆け寄ってよくやったって肩叩いて抱きついて。違うだろ。まず星野君は監督の俺の前に来て、バントのサインを無視して申し訳ありませんでしたと頭を下げるべきだろう。

美樹 …。

聡 そして、星野君がそうしなかったらそうしろと言うのがチームメイトの役目だ。なのに監督の俺を無視して大はしやぎ。

美樹 そりゃそうよ。九回裏でサヨナラ勝ちして決勝大会への出場を決めたらうれしいに。

聡 黙れ。

美樹 …。

聡 誰のおかげでここまでできたと思ってるんだ。

美樹 そんなに怒らなくても。

聡 はあ。

美樹 子供のしたことなんだから。

聡 大人の俺がたった一人で子供のなかに入ってどれだけ苦労したか。地区の役員だって保護者だって何にもしない。俺は全身全霊を注ぎ込んで四年間、この日を待っていた。それなのに。

美樹 なによ。

聡 子供のしたことだなんてレベルでやってんじゃない。俺の野球は遊びじゃないんだ。一つの作戦に全員が一丸となって勝利を勝ち取る。監督の俺の言うことを聞いて初めて成り

立つんだよ。そのところをわかってないよぼよぼジジイどもは毎年毎年ずつと負けてた。俺が監督なってそこんところを徹底的に教え込んで、その結果として今日の勝利があるベキなんだ。なのに最後の最後で俺を無視して調子に乗りやがって、何もかもぶち壊した。

美樹 バカみたい。たかが野球で。それも子供の聡なりに。

美樹 損した。たかが野球に勝ったぐらいで喜んで、わざわざ肉買って帰って。この暑いなか八分も自転車こいで、五百円ですむ晩御飯に千三百円も使って、また暑いなか八分自転車こいで。あーあ。バカみたい。喜んで損した。一生懸命になると損よね。力とお金を無駄にする。あーあ。自分のこと大嫌いになった。

聡 …。
美樹 ばつかみたい。野球なんて。

美樹、肉のパックを聡に投げつける。
肉は聡の顔の横を通り過ぎ、壁に当たり、床に落ちる。

美樹 自分で焼いて食べなさい。私はこれ（もうひとつの肉のパック）、自分の分だけ焼いて食べる。

聡 …。
美樹 喉かわいた。

美樹、冷蔵庫から発泡酒を出し、開けて飲む。

美樹 うま。

聡 …。
美樹 ユニフォーム、自分で洗って、自分でボタンもつけなさいよ。

聡 …。
美樹 拾っといてね、肉と、ユニフォーム。夜中に歩いてつまづいて転んで私が死んだらあなたのせいだからね。

聡 …。
美樹 答えろ。バカ。

美樹、手の発泡酒を聡に投げるようとする。
聡が怯えたのを見て、止め。

美樹 もったいないわ。良く冷えてるのに。

美樹、発泡酒を飲む。

美樹 野球やめるんなら、それ(床のユニフォーム)、ゴミ箱に。

聡 …。(答えない)

美樹 じゃ、私が。

美樹、床のユニフォームを拾ってゴミ箱に入れようとする。

聡 やめろよ。

美樹 え。

聡 やめろ。

美樹 あら。その前に。私に言うことがないかしら。

聡 …。

美樹 謝れよ。

聡 …。

美樹 謝れ。

聡 …。(謝らない)

美樹 バカ。

美樹、ユニフォームをゴミ箱に入れる。

美樹 なめられて悔しいんなら、出場停止にしてやればいいのよ。

聡 え。

美樹 ぼっちゃりほっぺでまんまる目の星野君。

聡 出場停止。

美樹 バントのサインを無視した罰。監督の力を見せつけるの。決勝大会の出場停止。黙るわよ、それで、他の子も。

聡 …。(驚く)

美樹 きかせたらいいじゃない、あなたの言うこと。監督のサインを無視したら試合に出れないことを思い知らせる。手ぬるいのよ、あなた。

聡 俺が、手ぬるい。

美樹 お父さんもお母さんもあつちで笑ってるよ。「まだまだ、ここがどういうところかわかっとらんなあ」「そうですねえ。いつまでもボンボンで」。

聡 …。

美樹 家で私に当たり散らすんじゃないくて、冷静に、監督として、やるべきことをやってよ。

聡 監督してやるべきこと。

美樹 子供たちを従わせるのよ。

聡 …。

美樹 それが野球なんでしょ。勝つために必要なんですよ。

聡 ああ。

美樹 大人のいうことを子供がきくなんてありえない。上から力で押さえつけられて初めてわかる。その積み重ねで学校を出て、社会人になって会社で働く。私だってあなただってそうして働いてるんだから。教えてあげなさいよ、それを、子供たちに。

聡 星野君の出場停止でか。

美樹 そう。

聡 …。(考える)

美樹 何考えてるの。

聡 …。(考えている)

美樹 あ。怖いんですよ。クレーム来るのか、星野君の親から。

聡 …。(その通り)

美樹 あはははは(笑う)。

聡 何がおかしい。

美樹 星野君て子の親、移住組でしょ。

聡 ああ。三年前に越してきた。市の斡旋でビニールハウス建てて、花を作ってる。

美樹 花。

聡 ああ。いい値で売れてるらしい。

美樹 それで甘く見てるのよ、ここを。都会でやっていけないなった俺でも逃げ込んでぬくぬく暮らせるちよろい場所だと思ってる。思い知らせてやらなくちゃ、ここがどういところか。

聡 ここって。

美樹 ここよ。この街。この地区。あなたのチーム。お上品には生きられない。好き勝手したらどうい目にあうか。

美樹、床の肉を拾う。

美樹 シャワー浴びといで。

聡 え。

美樹 おなかすいてるんだから私。

聡 俺の肉は。

美樹 焼いといてあげる。

聡 ありがとう。

美樹 うん。

聡 さつきはすまんかった。

美樹 え。

聡 すまん。言い過ぎた。

美樹 いいの、いいの。地区のチームが勝つとうれしいもんなんだなあって私、初めて知った。この生まれなのに、一回も観に行ったことないのよ、試合。応援なんか、全然。あなたが監督引き受けてもピンとこなくてなにそれって思ってたけど、今日の黒田さんの喜びようだったらないし、丸山さんや藤木さんも。ここに、そんな喜びがあるのかと思ってうれしかったよ、私は。

聡 …。

美樹、ゴミ箱からユニフォームを取り出す。

美樹 さあ、行って。ボタンも付けとくから。

聡 いいのか。

美樹 まだ大仕事が残っております。監督。子供たちをぎやふんと言わせ、決勝大会、勝って勝って勝ちのぼる。

聡 ひとつ勝つのがやっと思っけ。

美樹 弱気です。さ、行け。どうぞ。シャワーへ。

聡、リビングを出て、浴室へ。

美樹、床のボタンを探す。

美樹 ええと、ボタン。ボタン。

シャワーの音がする。

美樹はボタンを見つけた。

ついでに肉のパックも拾って立ち上がる。

溶暗。

二景

翌日。夜。

Tシャツにジャージの聡。ひとりで夕食を終え、飲みきれなかった発泡酒をチビチビと飲んでいる。

夕食の残りがのった皿の間に、コードレスタイプの
電話機が立っている。

聡 いきなり怒鳴りはしないだろう。(考えて) あっちも大人。それも一応は商売人だ。まず尋ねてくる。「どういうお考えで」。いやいや、そんな直球は投げてこない。ここは変化球。うーん。そう、「前例はあるのでしょうか」。そんなものあるか、ないにきまつてる、このバカと思っても口には出さない。ないとわかつて言ってきた。怒ったら負けだ。冷静に、冷静に。「前例はありませんよ、これは監督の私の裁量です」だ。「裁量」ということは好きなように決められるというわけですか」とくる。で「いやいや、好き勝手に。地区のため、チームのため、子供たちのために私なりに常識の範囲で」。うん、いいぞ。ここまで持ってくればこっちのもんだ。「星野君の御両親の御立場からすれば、うちの子がなんで出場停止なんだ。二塁打打ってチームの勝利に貢献したじゃないかと思いでしょうが、私はそれらことも重々承知の上で。一般社会であれば当然のことでしょう。監督の指示を無視するような選手は試合に出すわけにはいかない。学校や勤め先でも同じですよ。私は星野君が憎くて、出場停止にしたんじゃない。星野君の未来を思って、こころを鬼にして出場停止を命じたんです」。よし。いい。これで向こうが黙れば一件落着だ。

聡、発泡酒を飲み、

聡 いつまで待たせる。もう十時前だぞ。いくら花が忙しくても家に帰って夕飯ぐらい食うだろう。

聡、発泡酒を飲む。

聡 理詰めの説得でくるかもしれねえな。「うちの息子がでないと決勝大会、負けるんじゃないやありませんか。いったい何のために野球していらっしやるんですか」。がはは(笑う)、勝つために決まってる。勝たなくちゃ意味ねえんだよ、なにことも。がはは(笑う)。ああ、いや、違う。これはまずい。ここは一步引いて、ただ勝つためにやっているんじゃないと、今日、あいつらに言っただけに聞かせたみたい。くっくくくっ(思い出して笑う)。今日の俺、なかなかの役者だったよなあ。いつものように練習を始めさせてベンチで腕組み。お

もむろに立ち上がると、グラウンドでキャッチボールしているあいつらを呼びつけて、ベンチ脇の木陰に座らせて円陣を組んで、俺もその輪に入る。手にバットを持ち、眉間にしわを寄せ、これまでに出したことのないような低い声で話を切り出す。「四年前に僕は地区の人たちに頼まれて、監督を引き受けた。僕は選ばれたわけだ。地区の人たちに責任がある。そして君たちもこのチームで野球をするんだから地区の人たちへの責任がある。だから監督の僕の指示をきいて欲しい。僕は地区の人たちのため、君たちのために一生懸命指導してこのチームを強くする。毎年春、新しい選手が入るたびに僕はこの話をしたね。そして君たちは約束したはずだ。監督の僕の指示に従うと。そして、監督の僕と君たちの間には信頼が生まれ、一回戦で負けてばかりだった僕らのチームも二回戦、三回戦に勝ち進めるようになった。そして昨日ついに決勝大会への進出を決めた。僕らの夢がかなったんだ。なのに、僕は昨日、とても残念な経験をした。それがなんだかわかるかな」。ここで俺はわざと顔をあげず、表情を子供たちに見せなかった。小さく、でもはっきりと聞き取れる声で鋭く言うてやった。「星野君の二塁打だよ」。ゆっくりと顔を上げる。右目の端に見える星野君の顔がみるみる青くなってゆく唇をかみしめ、唾をぐくりと飲んだのがわかった。俺を見て、すがるような目で。俺は目を合わさなかった。見たら負けた。求めるだけ求めさせて、何も与えない。俺はまっすぐ前を見て、にこやかに言葉をつづけた。「星野君は僕のサインを無視して打って出た。見事なスイングだったよ。二塁へのヘッドスライディングもね」。ふん、バカ野郎、いい気になりやがってと腹の中で思っても顔には出さない。俺は上機嫌で話し続ける。「君たちも大喜びで飛び上がった。当然だよね。九回裏のサヨナラヒット。しかし、僕は考え込んでしまった。誰だってヒットが打ちたい、バンドなんかしたくない。でも我慢して、バンドして、自己犠牲の精神でチームの勝利を勝ち取ってきたのが僕らだ。僕のサインで君たちは何度もバントした。ところが星野君は監督の僕のバントのサインを無視したんだ。僕らの犠牲と星野君の二塁打。僕らは僕らの野球をどちらの上におくべきなのだろう」。星野君はからだをブルブルと震わせて、歯をガチガチいわせていた。目は落ち着きなく左右を見、まるで捨てられた犬だ。俺は冷静に話を続けた。「星野君の二塁打は僕と君たちが作り上げてきたこのチームの信頼をぶち壊す。僕はこの考えが頭から離れない。君たちはどう思うかな。星野君は監督の僕との約束

を守らなかつただけじゃない。チームメイトの君たちとの約束も守らなかつた。僕を監督に選んだ地区の人たちや君たちのお父さん、お母さんとの約束も破つたんだ。違うかな」。星野君はクリクリの目をまん丸に見開いて僕を見た。僕は選手たちの目を右から順番に見ていったけど星野君の目だけは素通りした。そこに誰もいないかのように視線を合わせず、何も見ないで次の選手に移った。僕の目が通り過ぎると星野君はがっくりと頭を前に落とし、二度と上げなかつた。ざまあみる。俺を無視した罰だ。子供たちは黙っている。俺はゆつくりと言葉を繰り出した。「僕は悩んだんだよ」。 (考えて) あれ、俺は何を悩んだっけな。ええと、あ、いや、言っていないぞ、こんな言葉の、子供たちの前で、「僕は悩んだんだよ」。 うん、言っていない。ええと、この先はどう続けたんだっけ、ええと。あ、とにかく、細野君の首は前に落ちて、勝負はついたからな。「星野君の出場を停止したいと思う」って言つたときにびっくりして顔を上げたのはほかの子たちで星野君は死んでるみたいにピクリとも動かなかつた。そのまま顔上げないで帰つてつたけど、近づいて顎持つて、無理やり顔上げさせて目をのぞき込んでやればよかつたかな、唾吐きかけて。(想像して) いやいや、いかんいかん。そんなことしたら。くつくつくつ(笑い)、笑つちまう。せつかくの名演技が台無しだよ。クソガキ。俺が世の中を教えてやっているんだ。お。(気づいて) 世の中教えてやるって、なかなかのフレイズだな。ええと、さっきの、「僕は悩んでいるんだよ」とくつつけて。よし。

聡、発泡酒を飲み、

聡 「お父さん、私も悩んだんですよ。たかが野球。監督のバントのサインを無視するぐらい大したことじゃない。そういう態度も少年野球の監督としてありだなと、私も、思わないわけでもない。しかし。私も地区の皆さんに頼まれて監督を引き受けている以上、責任がある。野球も教育です。地区の野球では地区で暮らすことを教えないといけない。地区に必要なのは助け合いです。自分だけよければという考えは通用しない。自己犠牲がどうしても必要になる。バントは自己犠牲を教える教材です。無視して構わないなんて子供たちが育ってしまったら、地区にとってマイナス。私たちは子供たちに世の中の道理を教えなくてはなりません。そうでしょう、お父さん」。

聡、発泡酒を飲み、

聡 移住組でこの意見に反論できる奴はいねえよ。

聡、発泡酒を飲む。

聡 嫌なら出てけばいい。親も子も一緒に、家族で。

聡、発泡酒を飲み、

聡 ざまあみる。

玄関のドアが開く。

美樹が帰ってきた。

聡 おかえり。

リビングに入る。手にスーパーの袋。

美樹 ただいま。

聡 よ。

美樹 ご機嫌ね。

聡 まあな。

美樹 お風呂は。

聡 沸いてるよ。俺はシャワーですませたから。先入れよ、疲れたろ。

美樹 くたくた。閉店に時間早くなって、営業十一時までになつたのに仕事は減らない。夕食の時間過ぎてもお惣菜作るなんて意味不明。

聡 飯は。

美樹 食べた食べた。賞味期限切れの海鮮チラシニパック。ここにまだひとつ、あなたに。

美樹、袋から海鮮チラシを取り出して見せる。

聡 いらねえよ。腹壊す。

美樹 あはは（笑って）。大丈夫、大丈夫。うちの魚は。じや、お先にひと風呂。

美樹、風呂に行きかけるが、

美樹 おっと。その前に、ご報告。

聡 なに。

美樹 株を上げたわよ、またまた。

聡 かぶ。

美樹 そう。

聡 なに。

美樹 ぶちかましたでしょ、今日、あなた、星野君に、出場停止命令。

聡 ああ。

美樹 大評判。惣菜部だけじゃなくて、店中で。

聡 え。

美樹 ツイッター。「二墨打の星野君出場停止、別府監督命ず。バントのサイン無視は約束破り」。

聡 …。(驚いて)

美樹 チームの子から聞いた誰かがつぶやいたのよ。

聡 へえ。

美樹 そしたらさあ。普段はインターホンで指示出すだけのめったに顔みせない惣菜部の部長の大川がわざわざ調理室に来て「骨のある旦那さんだねえ」って私に。

聡 言ったのか。

美樹 言った言った。大川だけじゃない、レジ長の三橋に総務部の権藤。フロアディレクターの松木まで。

聡 来たの。

美樹 来た来た。店の管理職の男性で出勤してる奴はみんな来たんじゃないかな。「骨のある御主人だねえ」って口々に。

聡 あるに決まってるけど、骨ぐらい。俺。

美樹 妻がどんな女か見たかったのよ。

聡 え。

美樹 そういうもんでしょ。男って。

聡 …。

美樹 女ばっかりの職場で管理職してたらむかつぱら立つことばかりでしょ。やれ子供が熱出した、大雨警報が出た迎えに行く、親が病気で入院した、認知で介護が必要だで突然休んだり辞めたり、相当迷惑してるのに、ぐっところえて「しようがないね」って笑い、自分で全部穴埋めして家族のために働いているのに、家では女房の尻に敷かれて窒息してるに決まってるんだから言ってみたいのよ、あなたみたいに。

「出てけ。クビだ。辞めちまえ」。

聡 クビだなんて言っただけで、俺。

美樹 同じことですよ。出場停止。

聡 …。

美樹 そう簡単に言えない一言。それを言い放ったあなたがうらやましい。そしてその妻がどんな女なのかを見てみたい。

聡 どんな女かって、お前がか。

美樹 そう。

聡 …。

美樹 貞淑な妻に見えたんじゃないかな。骨のある夫に黙って従う理想の妻。

聡 おいおい。

美樹 そういう妻を求めているのよ、あいつらは。

聡 あのなあ。

美樹 監督のサインを無視するガキはいらん。追い出せ。痛い目に合わせてやれとわめく女とは思わない。

聡 お前に言われたからやったわけじゃないぞ、俺は。

美樹 あら。

聡 俺は自分の考えで。

美樹 あなたひとりの考え。

聡 あ、いや、お前の考えも考えもあるけれど最終的に決断したのは。

美樹 心強かったですよ。私の応援があつて。

聡 え。

美樹 私に味方してもらえて。

聡 …。(その通り)

美樹 違う。

聡 いや。

美樹 あら、そう。どうでもよかったの、私がどう言おうが。

聡 いや、あの。

美樹 どっち。

聡 え。どっちって、それは。

美樹 言えないの。

聡 …。(言いたくない)

美樹 もういい。知らない。勝手にして。

聡 え。

美樹 お一人で。どうぞ、好きに。

聡 おいおい。それは。

美樹 …。(答えない)

聡 ちよっと待てよ。

美樹 …。(答えない)

聡 おい。

美樹 どうちよつと待つ。

聡 え。

美樹 どうちよつと待って欲しいの、私に。

聡 ええと。

美樹 一人じゃ心細い。応援して欲しいでしょ、妻の私に。

聡 ああ。

美樹 心強い。妻が味方にいると。

聡 そうだな。

美樹 今日、私の顔を見に来たあいつらにはいないのよ、そういう妻が。家で独りぼっち、仕事場で独りぼっち。寂しいからあなたがうらやましかった。クビを言い放てる男。そしてそれを支え、許す妻。その妻の顔を見に私のところに来て、ああこういう妻がいてくれたらと、欲しくてほしくてたまらない。

聡 お前を欲しくて欲しくてたまらない。

美樹 そうよ。一人でさびしい夫の味方してくれる妻を喉から手が出るほど求めている男たちの顔を今日いくつ見たことか。

聡 なんだそりゃ。

美樹 つぶらな瞳がひとつふたつみつよつ。

聡 やめろよ。

美樹 え。やめていいの。なってみる、あの寂しい顔、つぶらな瞳に、あなたも今から。

聡 …。(怖い)

美樹 嘘ウソ。ああ、ゆかいだったなあ、今日は。

聡 飲むか。風呂の前に一杯。

美樹 いえいえ。それは風呂上りに。

美樹、風呂に行きかけて、また止まる。

聡 飲むのか。

美樹 いえいえ。もうひとつ。いいお知らせ。

聡 なんだ。

美樹 星野君のお父さん、ただの花屋じゃなかったよ。

聡 え。

美樹 市長にヒモでつながってた。

聡 市長にヒモ。

美樹 次の市議会議員選挙。出るだって。

聡 え。

美樹 丸山さんが調べてきてくれたのよ、あなたのこと心配して。

聡 心配。

美樹 心配でしょ、星野君の親がどんな人か。

聡 父親はいかにも脱サラ、一（アイ）ターンて感じの男だぞ。

美樹 ヒョロヒョロつとした頼りのないフチなし眼鏡。顎の細い。

聡 ああ。

美樹 罪なさそうな顔しているけど。

聡 なにかあるの。

美樹 市が始めている一ターン事業、一番に申しこんで一番おいしいとこ持ってってるのよ。低金利の融資でハウス建てて花作りの設備を一通りそろえた上に作った花は市の買い上げ。

聡 え。

美樹 作れば作るだけ売れる。儲かる。へんじゃない。絶対、損しない。

聡 ああ。

美樹 どうしてそんなことができるかというと、市長とコネがあつて、いずれ市長派の市議員として。

聡 出るの。あの人。

美樹 出るのよ。よそから転入して花作りで成功したとなればセールスポイントになるでしょ。

聡 難しいぞ、ここは。昨日今日できた街じゃないんだから、地縁、血縁。

美樹 それはそうよ。だから入念に準備してるんだって、市長ともしよっちゅう会って。

聡 ふうん。で、何。そのどがいい知らせなの。

美樹 ツイートしてるのよ、市長が。

聡 ツイート。

美樹 つぶやき。ツイッターの。

聡 市長って原田だろ。北校出て、市役所職員してて、大卒を押しつけてゴリゴリ出世した。

美樹 そう。原田。

聡 あいつ。できるの。機会苦手でパソコン使えないって評判だけ。

美樹 誰が打っているかしらないけど、ツイッターしてるのよ。それでさつき、ついさつきよ、藤木さんがスマホいじっ

てて見つけたの原田のツイート。

聡　なんて。

美樹　「わが市にまたひとり有能な人材あり。子供を甘やかさず厳罰お見事」。

聡　「子供を甘やかさず厳罰お見事」。

美樹　あなたのことよ。

聡　俺。

美樹　そう。

聡　どうして。

美樹　丸山さんの推理よ。星野君のお父さん、あの縁なしメガネが市長に言う。どういったかはわからないけど、うちの息子が昨日こんな目にあった。少年野球の監督でこんなことをする奴がいる。もしかすると文句言って、市長に泣きついたのかもしれない。ところが市長は全然そう見ず、あなたの星野君への出場停止を評価した。厳罰指導お見事って。

聡　ほんとか。

美樹　ありえない話じゃない。今日、このタイミングで「子供を甘やかさず厳罰指導お見事」って言えば。

聡　なるほどなあ。

美樹　原田はあれよ。もともと市の職員だったくせに公務員改革をぶち上げて市長選に勝って市役所職員を絞り上げるから、市役所の中で反発くらって苦労してるの。だからあなたの監督としての指導がありがたかった。自己犠牲しない職員ばかりだったらまわらないでしょ、うちの市。好き勝手な住民ばかりなんだから。星野君のお父さん、原田に泣きついてガツンとカミナリ落とされたかもよ。

聡　そうか。

美樹　原田、怒るとヤクザらしいから。

聡　へえ。

美樹　「自己犠牲なしでここで議員できると思うなよ。嫌なら花屋やめる。出てけ。そのかわり、市が融資した金は返せ。契約違反の罰金も払え」。

聡　そうか。その手か。ブラックだな、うちの市も。

美樹　そうそう。

聡　いいように使える駒として「ターンを餌に外の人材を釣り上げる」。

美樹　収入の道は握られてるから、何言われたってきくしかない。

聡　うん。

美樹　星野君の親はクレームつけてこない。市長があなたの

側に立ってるんだから。

聡 よし。

美樹 いい知らせでしょ。

聡 ばんざーい。がはは（笑う）。もう一本、飲もう。

聡、冷蔵庫から発泡酒を取り出そうとする。

美樹 ビクビクしてたんでしょ。電話、そんなところに置いて。

聡 ∴。（ずぼし）

美樹 してたんでしょ。ビクビク

聡 くっくくく（笑い）。そう。お前の言う通り、おどおどビクビク、心配で心配で、ちっとも酒が。がはは（笑う）。

美樹 市長の原田がこっちの味方なだから。負けやしないわよ。お父さんも、監督のバンドのサインを無視したお前が悪いって星野君を叱るしかない。「自己犠牲を嫌がるとういう目にあうんだ。お父さんは市長さんにお前のせいで叱られたじゃないか」。

聡 がはは（笑う）。

美樹 勝ったのよ、あなた。

聡 勝った、俺は。がはは（笑う）。

美樹 そう。

聡 よし。飲むぞ。今からもう一回。お前も早く、風呂入ってこい。宴会宴会。

美樹 天ぷらと酔の物。賞味期限切れ持って帰ってきたから。つまもうよ。

聡 よつしや。海鮮チラシも。

聡、ビニール袋から食品を取り出す。

美樹 私もシャワーにするから、出るよ、すぐ。

聡 オーケー。

美樹 食べちゃダメよ、酔の物。沖縄のモズク。めったに売れ残らないんだから、この時期。

聡 わかった、わかった。

美樹、浴室へ。

聡、電話機を脇にどけて、ビニール袋から天ぷら、酔の物を取り出す。

聡、冷蔵庫から発泡酒を取り出して、開け、グビグ

ビと喉を鳴らして飲む。

聡 あー。うま。

聡、モズクではなく天ぷらに手を伸ばす。

浴室からシャワーの音。

溶暗。

三景

数日後。

昼過ぎ。暑い。

星野家のリビング。

テーブルに麦茶。

美樹が電話している。

美樹 はいはい、ええ。それは。うちの主人もずいぶんとそこを悩んだようで、ええ。大切なお子様をお預かりしているわけですから。はい。ええ。そう、そう、そうです。真面目なんですよ。年をとる度にひどくなつて。いえいえ。特に野球。それも子供、とりわけ男の子のことになると損得抜きで夢中に。私たちに子供がないせいもあるかと。ええ、いないんですよ、私たち。いろいろやっただけなんですけれど、どうにもこうにもできなくて。つい、自分の子供みたいに思つて。はい。ええ、でもゆき過ぎるとあれですものね。無理じいや押しつけに。今回の件も。いえいえ、はい。そうです。星野君のお父様、お母様が御理解のある方々でよかつた。実は主人、心配していたんですよ。お宅の御主人からクレームの電話がくるんじゃないかって、かなり。はい。気の小さいところがあるんですよ、それも。まじめ過ぎるんでしょうね。その点、私なんか大ざばつていつも叱られてばかり。いえいえ全然。お宅の御主人みたいにお勤めをやめて新しい場所でバーンと花作りなんてうちにはとても。いえいえ、ほんとに。人の目ばかり気にして自己犠牲。それを損に思わないのがうちの主人の取柄でして。はい。ええ、いやでしょ、こういう町。どん詰まりで逃げ場がない。やっぱりこんなところ引越してくるんじゃないかなつたなんて今回の事で星野君のご両親に思われたらどうしよう、この町の生まれですから私もね、気になるんですよ。でもよかつた。はい。よろしくお伝えください、御主人にも。ああ、そして、あの星野君にも。あ。元気になっている。学校にも行ってらっしゃるんで

すね。はい。やっぱり。お父様お母様の教育がいいから。将来が楽しみ。私たち少しでもそのお役に。はい。わかりました。主人にもそう伝えます。え、何ですか。はい。もちろん。決勝大会、星野君の分まで。はい。では。また。

美樹、電話を切って、テーブルに置く。

美樹 あー、疲れた。向こうもだろうけど。

美樹、麦茶を飲む。

美樹 なんてこういう時、こういう電話を私たちがしないといけないのかね。男だけでやりやあいいのに。女が出て、話をこう、男の都合のいいほうにそれとなく持つてってまとめあげる。(電話機を見て) 疲れるよね、お互い。あーあ。ま。こつち以上の事情が向こうにはあるんだろうけど。先に向こうから電話してきたってことは。

美樹、麦茶を飲む。

美樹 「あー、お前、ちよつとやつといて」「何を」「電話。あつちに」「あつちつて」「監督だよ。あの別府に」「いつ」「今日にでも」「監督に私が電話、今日」「いやいや。向こうの嫁に。女同士の方が、なにかとあれだろ」「あれって何よ」「あれはあれだよ。これからのこともありますしって適当に」「あの子にあんなことされてすませるんですか、なあなあで」「なあなあじゃないよ。こういう筋の通し方もあるつてことさ。暮らしが一番だろ、女は。何があつても日々の暮らし。御近所付き合いはお前の仕事だ。頼むよ。俺は花で忙しい。お前から電話一本。こういうのは女同士の話で方をつけるのが一番いい。子供のことなんだから」「でもね」「つべこべ言わずにやれ。俺の言うことがきけんのか」。みたいなやり取りがあつて、夫の留守、パート勤めの女房だけが家にいる時間を見計らつてご丁寧な電話をかけてくる。あ。いや。待てよ。

美樹、麦茶を飲む。

美樹 ヘンだよな。今の電話。どうしてあつちからかけてきたんだろう。「監督さんがお気を悪くしてらっしゃるんじゃない

ないかと心配で」なんてとってつけたのまるわかりの理由で。みじめに思わないのかねえ。あんなに低姿勢。下手（したて）に出過ぎだよ。しかも妻の私に。

美樹、麦茶を飲む。

美樹 わからん。移住組の考えることは。

玄関のドアが開く。

聡が帰ってきた。

美樹 あー。もしかして子供を持つ親の気持ちがわからんのか。私は。

聡、リビングに入る。作業服姿。

聡 おいおいおいおい。

美樹 早いわね。まだ三時前よ。

聡 たいへんだ。

美樹 なに。

聡 市長から電話が。

美樹 市長って原田。

聡 そう原田。

美樹 いつ。

聡 今日の二時過ぎ。

美樹 ついさつきじゃない。

聡 ああ。突然。ユニフォームより、作業着がいいって。

美樹 え。

聡 俺と写真撮って市の広報に。

美樹 なんなの。

聡 あるだろ。毎月だか毎週、市が出しているペラペラの新聞。あれの俺と市長のツーショットが。

美樹 載るの。

聡 載る。

美樹 なんでまた。

聡 それはあれだよ、例の星野君の二墨打の厳罰対応を市長がえらく気に入って。

美樹 あなたと一緒に工場（こうば）で写真撮るの。

聡 「郷土のものづくり企業」っていうコラムがあるんだよ、あのペラペラに。うちの市はものづくりの町ってことで売り

出しているから。

美樹 大企業が寄り付かないから中小が多いだけでしょ。あなたのところだって昔からネジ。どうしてあんなもの作って食べてゆけるのか、悪いけど私にはさっぱりわからない。

聡 え。

美樹 七不思議よね、世界の。

聡 地味でも技術は高いんだよ。うちの製品は精度がいい。ネジなしで動く機械はないからいつまでも注文はなくなるなら

ない。よその国からも勉強に来てんだぞ、熱心な子たちが。

美樹 人件費ケチってこき使ってるんでしょ。

聡 してません、うちはそういうこと。ちゃんと技術も習得させて国に帰らせてんだ。賞状だって何枚ももらってる。

美樹 感謝状でしょ、どこだかわかんない国の、どこだかわかんないところから。

聡 ありがたいじゃないか。

美樹 じゃ、あなたじゃなくて社長か工場長が載ったほうがいいんじゃない、市長とツーショットで。

聡 そうはいかねえよ。

美樹 なんて。

聡 御指名なんだから、市長からの。

美樹 へえ。

聡 新しい下着、出してくれ。

美樹 新しい下着。

聡 作業着の新しいのは工場にあるんだけどよ、せっかくだから下着から新しく。

美樹 え。

聡 わかるだろ。この気持ち。

美樹 はいはい。

美樹、新しい下着を取りに行く。

聡 市長も市長だよ、いきなり社長に「市長の原田だ。お宅に、別府監督はお勤めかな」だって。まいっちゃうよ、この俺が「別府監督」だよ。工場じゃ監督なんて呼ばれたことないのに。社長が「え、別府ですか」って言ったたら市長、「技術者としても優秀な方らしいね」って。確かに俺は優秀なんだけど、そんなにはつきり市長から言われると、困っちゃうよ。立場ってもんがあるからね、職場にもいろいろ。

美樹（声） バカね。お世辞に決まってるでしょ。

聡 お世辞なもんか。優秀なんだぞ、俺は本当に。

美樹（声）　じゃ、どうして二十年も働いて課長になれないの。現場次長どまり。

聡　技術者なんだよ、俺は、ねっからの。管理職はまっぴらだ。

美樹、下着を持って出る。

美樹　だったら野球の監督なんか辞めたらいいのに。

聡　え。

美樹　管理職ができない人に野球の監督は無理。

聡　そんなことあるもんか。

美香　バンドのサインを無視されたぐらいで逆上して。

聡　…。

美樹　はい。下着。

美樹、ビニール袋に入ったままの新しい下着をテールブルに置く。

聡　監督は辞めないよ。ようやくここまで来たんだ。

美樹　ここまでって、どこまでよ。

聡　市長から電話が来るところまでだよ。俺が、監督としてようやく評価され始めた。社長も工場長も俺を見る目が急に変わったね。「そうかそうか。別府君。いつか何かやる男だと思っていたけれど、とうとう」って社長、俺の肩を叩いて、「ありがとう。インタビュもあるそうだから我が社をどーんとアピールしてくれ。私ももちろん話すけど、今日の主役は別府君だから。頼むよ」って社長、頭下げたよ。

美樹　へえ。

聡　あのペラペラ新聞読んで、社長、歯ぎしりしてたんだって、いつも。「どうしてうちじゃなくてよそばっかりなんだ」って。

美樹　パイプがないからでしょ、市長と。まじめにネジ作ってるだけで。

聡　なに。

美樹　いいネジ作っても永遠に載らないわよ。いっぱいあるんだから、中小の工場。

聡　…。

美樹　よかったじゃない。あなたのおかげで、市長とパイプでつながった。載るんでしょ、広報、写真入で。

聡　ああ。この時間に俺が抜けたら、ライン止まった時に元

に戻せる奴がいなくなるのに社長も工場長も行って来い、シヤワー浴びて下着新しくしてこいって。

美樹 シヤワー。

聡 そうそう。シヤワー。髪も洗って、パリッとしないと。

美樹 早く、浴びなさいよ。

聡 はいはい。

聡、新しい下着を持って、浴室へ。

美樹 あの市長の原田とパイプ。

聡(声) 工場長は俺が監督していることを良く思ってたなかつたんだよ。三交代で、夜勤やめて、日勤だけにしたら。夜に機械の管理できる奴が減って、シフト組むのが難しくなつたからブツブツ言つたのに、態度コロツと変えやがって。ザマアミロつてんだ。

美樹 おきないかな。うちのスーパーでも、そういうの。

聡(声) え、なに。

美樹 私もそういうふうに見返してやりたい。惣菜部長の大川にフロアディレクターの松木。

聡(声) がははは(笑い)。無理無理。スーパーじゃ。

美樹 なんです。

聡 あー。(思い出して)

聡、リビングに戻る。パンツ一枚で。

美樹 なに。

聡 大事なこと言い忘れてた。

美樹 まだあるの。

聡 俺もさ、市長と話したんだよ、電話で。社長から内線が回ってきて。

美樹 話したんだ、原田と。

聡 キンキン響く甲高い声でまくし立てるんだよ「あのね、監督。これまだ内緒でお願いしたいんだけど、来週市の少年野球の決勝大会。私は市長として出席して開会式でスピーチします。で、そこで例の、別府監督と星野君のころ温まる物語、師弟愛というのかな、地区の人たちに選ばれ、少年野球の監督として子供たちの指導に責任を負う別府監督の苦悩と決断。それを受け入れ成長の糧にする星野君。この美しい物語をね、市政における私の苦悩、戦いと絡み合わせて紹介させていただきたい。かまわないかね。実はもう市役

所で、私、別府監督のエピソードを職員に訓辞として使わせていただいているんだけど、もっと広く市民の方々にも知っていただきたい、その第一歩として、別府監督と星野君のいらっしやる今度の開会式でご紹介したいと考えた次第です。もちろん、文章は市の担当職員がうまく書きますから、監督に失礼になるようなことは絶対にはいたしません。星野君の御両親からはすでに承諾をいただいております。たまたま私と懇意にしている二人でしたので、快くOKしてくださいました。そうそう。二人からも監督によるしくとのことでした。いかがでしょう、この件」。

美樹 OKしたの。

聡 したよ。うれしいじゃねえか。決勝大会の開会式。市長のスピーチに俺が登場するんだ。入場行進を終えてグラウンドに整列する選手たち。俺はほかのチームと監督と一緒にグラウンド脇に立ち、まっすぐ前を見て、微動だにしない。口元緩めたりしたらみつともないだろ。キュッと引き締めて、涼しい目で空を見る。

美樹 帽子を取って頭ぐらい下げたほうがいいんじゃない。聡 え。そう。

美樹 親しみやすいわよ、そのほうが。微動だにしないなんて軍人みたいで威張ってる。

聡 うーん。

美樹 厳しいだけじゃダメよ。

聡 でも笑うのは。

美樹 にやけたらダメだけど優しく微笑むぐらいは。

聡 優しく微笑む。

美樹 うん。

聡 となると、こうか。

聡、立って、帽子を取るしぐさ。神妙な顔で頭を下げ、上げて、帽子をかぶる。優しく微笑もうとするが、内心のニヤケが顔に出て口元が緩む。

美樹 にやけてるわよ。

聡 ダメだ。こみ上げてくる。抑えきれん。

美樹 ダメね。日陰者が日に当たると。

聡 ナメクジだ。溶けて流れちまう。

美樹 ナメクジは塩よ。日にあたって溶けるのはイカロスの翼。

聡 あ。空を飛ばうとして地に落ちるやつだな。

美樹 そう。

聡 俺もずっと下積みで、子供の頃から野球好きだったけど補欠で、まともな大会なんか出たことないし、開会式に名前呼んでもらえるなんて。(涙ぐむ)

美樹 え。泣くの。

聡 うるせえ。

美樹 やめてよ。こんなことで。みっともない。

聡 わかってるよ。ちくしょう。

美樹 もういいから、奥歯かみしめて、口元を緩めない。

聡 うん。

美樹 じつと前を見て動かない。

聡、うなづき、奥歯をかみしめ、直立不動。

美樹 胸を張る。

聡、胸を張る。

美樹 うん。いい。それで。

聡、姿勢を解き、

聡 これでいくよ、開会式。

美樹 うん。

聡 シャワー、浴びてくる。

聡、浴室へ。

美樹 晩御飯。肉にするね。

聡の返事はない。

シャワーの音がする。

美樹 (気づいて) あーっ。そっかそっか。だからさっき奥さんから電話だったんだ。(聡に) さっき、星野君のお母さんから電話があったのよ。

シャワーの音。

聡の返事はない。

美樹の声は届かなかった。

美樹 市長の原田がウソつきだと私が思ってることをあつちも知ってるってことよね。原田なら、星野君の両親の承諾を取ったとウソをつけてまずうちの人をだまして、承諾を取り、それを盾に星野君の両親を説得する。原田の電話なんか信用しちゃダメ。広報になんか載らなくていい。開会式のスピーチのネタなんて断れって私が言うだろうと察したわけだ。それで先手を打って、さっきの電話。あはは（笑う）、おもしろい。（大きな声で、浴室の聡に）あなたー。これ。たいへんよ。ものすごい戦い。原田、本気よー。

聡の返事はない。

美樹 ま、いいか。夕ご飯食べながらゆっくり。（考えて）それにしても星野君のお父さんはなにしてるんだろう。今日のこの展開だと原田とつながっているのは星野君のお母さんかも。尻に敷かれてるのかもなあ、お父さん。「私がうまくやるから引っこんでなさい。あんたは花だけつくってりやいの」みなたいな。あはは（笑う）。となるとどうなんだろう。

美樹、考えながら、テーブルの麦茶を片付ける。

美樹 開会式には星野君の家の花が飾られる。その花作りでお父さんは忙しくて家に帰れない。星野君と話す時間もない。だからお母さんだ。で、そういうお父さんが作った花が開会式で飾られ、原田がスピーチしてうちの人と星野君を紹介し、子供たちと我が市役所職員のあるべき態度を語る。うちの人は直立不動で奥歯をかみしめ、笑いをこらえて胸を張る。星野君は、あれ、星野君はどうするんだろう。出場停止で家。いやいや、スピーチに登場するんだからいたほうがいい。ベンチに、試合には出ないけどユニフォームを着て、他の子ども達と一緒に。いやいや、それじゃあ出場停止のインパクトが弱くなる。市長の原田は自分に都合のよい演出を考える。（見て）あれ、ここに花なんか飾ったことあったっけ。黄色い花。

美樹、テーブルに幻を見た。

美樹 まさか、まさか。嫌だわ、黄色い花なんて。

美樹、気づく。

美樹 あ。来賓席。星野君は市長の隣に座る。お父さんの作った黄色い花に囲まれた来賓席。原田のスピーチで、立ち上がって一礼。そういう開会式。そういう星野君。そういう少年野球。星野君は一礼して座り、市長の原田にニコツと微笑みかける。ウソつきの原田に負けないぐらいの大きな大きなウソ。グラウンドで走り、投げ、打つ子供たち。その輪のなかに入れない星野君はウソつきの市長の隣におさまって、どこでどんな大人に。あれ（見て）、黄色い花。もう枯れて干からびて黒く。え。何を見てるんだらう。私。ここで。なにが浮かんでくるの。星野君、笑っている。ここは、どこ。

美樹、見回す。

聡の気配はない。

シャワーの音もしない。

別府家の食卓は割れて裂けた。

美樹は足元を失い、どこまでも下に落ちてゆく。

溶暗。

四景

決勝大会当日。

早朝。

日の出前。暗い。

別府家のリビング。

テーブルに電話機。

ぱりっとした真新しいユニフォームを着た聡が、電

話機を前にして座っている。

電話が鳴る。

素早く聡は電話をとる。

聡（押し殺した声）はい。ええ。ええ。まだ。はい。わかりました。え、ユニフォームを着てた。ええ、背番号は8。間違いありません。はい。

電話が切れる。

聡、受話器を戻す。動かない。

寝間着姿の美樹が起きてくる。

美樹 早いね。まだ四時になってない。

聡 寝てられねえよ。大事な試合の日の朝に。
美樹 ふうん。もう着替えたんだ。

聡 考えるんだ、作戦を。試合の朝は、これ着て。

美樹 いつもいつもご苦労さん。浮かぶの、それで。いい考えが。

聡 …。

美樹 わかんないなあ、野球は。

聡 お前、今日は。

美樹 行くわよ、応援。お弁当持って。市民スタジアム。

聡 そうか。

聡は黙る。

美樹は冷蔵庫から麦茶を出して飲む。

美樹、出すの、今日も。バンドのサイン。

聡 え。

美樹 出すといいよ。あなたが出して子供がバンド決めたら、それだけで拍手。

聡 …。

美樹 「送りバンド成功。別府監督、手堅い試合運び。これですね。これがこのチームの持ち味ですよ」。一点も取つてないのに盛り上がる、送りバンドだけで。

聡 バカなこと言うな。

美樹 バカじゃないわよ。ファンサービス。みんな待ってるんだからあなたのバンドサイン。

聡 ノーアウトランナー一塁なんて今日の試合で一度あるかないかだ。

美樹 じゃ、その時は必ず。

聡 …。

美樹 やらなくちゃ。手堅く、持ち味。わかった。

聡 …。(答ええない)

美樹 なに。こわい顔して。

聡 …。(答ええない)

美樹 せっかく教えてあげてるのに。あなたは厳しく子供たちを指導して手堅いチームを作り上げ、決勝大会まで勝ち進んだ。お客さんは、

聡 黙れ。

美樹 え。

聡 黙れっつていつてるだろ。

美樹 どうして黙らなくちゃいけないの。

聡 …。

美樹 藤木さんも黒田さんも丸山さんも口をそろえて言うのよ。さすが別府さん、内助の功だねって。

聡 内助の功。

美樹 市長の原田もこの内助の功を誉めるべきよね。

聡 なに。

美樹 でしょ。

聡 俺は電話を待っているんだ。

美樹 電話。

聡 ああ。

美樹 何の電話よ、こんな朝早くから。

聡 秘書室の近藤さんだ。

美樹 秘書室の近藤さん。

聡 市長秘書室の近藤さん、室長だ。

美樹 室長があなたに何の用なの。

聡 星野君が首を吊った。

美樹 え。

聡 首を吊ったんだ。自分の部屋でついさつき、三時前。

美樹 …。

聡 どんな音だかわかんないけどすごい音がして、母親が行ってみると部屋のカーテンレールにベルトを掛けて、ユニフォーム着た星野君が。

美樹 そんな。

聡 父親はなんでだか知らん、家にいなくて。母親が星野君を床におろして救急車を呼んだ。今、病院だ。

美樹 どうなの。容態は。

聡 (首をふる)

美樹 ダメなの。

聡 でてこない、集中治療室から。

美樹 それならまだ。

聡 秘書室の近藤さんはダメだろうって。

美樹 どうしてわかるの。

聡 詳しいんだよ、あの人は、こういうことに。

美樹 …。

聡 市の職員で何人もみてるらしい、首吊りを。九分九厘助からん。

美樹 やめてよ。

聡 九分九厘だぞ。野球なら三割打つのもたいへんなのに。

美樹 やめて。まだ助かるかもしれないんだから。

聡 …。(思えない)

美樹 そうでしょ。

聡 ああ。

美樹 あなた。

聡 助かって欲しいよ。俺だって。

美樹 …。

聡 頼む。助かってくれ。せめて命だけでも。

聡は電話機に向かって祈る。

電話は鳴らない。

美樹 今日は中止。

聡 わからん。うちのチームだけのことにして大会はやるかもしれない。日をあらためるのは大変だ。

美樹 うちのチームだけってことないでしょ。市長があれだけ口出しして、今日の開会式のスピーチだって、星野君とあなたのことしゃべるんですよ。私、言っちゃったよ、みんなに。

聡 言わないさ、星野君のことも俺のことも。来るかどうかもわからん。

美樹 …。

聡 いい天気なのになあ。今日。

美樹 …。(言葉が継げない)

聡 俺が出場停止にしたから。

美樹 言っちゃダメよ、そんなこと。

聡 どうして。

美樹 私がそうしろってあなたに言った。

聡 お前。

美樹 でもこれは私のせいじゃない。

聡 お前のせいじゃないさ。実際に命じたのは俺だ。

美樹 あなたのせいじゃない。私のせいでもない。市長の原田も、地区の人も、私やあなたの職場の人だって褒めたたえた。星野君のお父さん、お母さんも。出場停止命令を。

聡 こうなっちゃまえばそんなの何の意味も。

美樹 そんなことない。

聡 俺はバンドのサインを無視されて頭にきた。二塁打打って得意顔の星野君が許せなかった。叩き潰したかった。それで出場停止を命じて、本当に叩き潰してしまったんだ、星野君を。

美樹 違う。

聡 なにが。

美樹 星野君は自分で自分を叩き潰したのよ。

聡 え。

美樹 自殺なんだから。

聡 そりゃそうかもしれないけど。

美樹 弱いよ。

聡 え。

美樹 自己責任。こんなことで首吊るなんて。

聡 弱い。自己責任。

美樹 そう。あなただだって私だって嫌なことはいっぱいある。それでも首を吊らないで生きてる。思うようにならないぐらいで吊ってたらいくつ首があっても足りないわよ。

聡 でも弱い子には弱い子なりに指導してやらないと。首はひとつしかないんだから。

美樹 やめて。

聡 …。

美樹 あなたは監督として冷静に考え、悩んだ末、星野君のためを思い、出場停止を決めたの。許せないとか、腹が立つとかじゃない。正直に告白なんかしたらダメ、絶対に。わかるでしょ。みんな建前で生きてる、市長の原田も秘書室の近藤も建前を崩されたら手のひら返して、ここぞとばかりにあなたになにもかもを押し付けてくる。

聡 …。

美樹 別府監督がそんなつもりで星野君を出場停止にしたなんて思わなかった。冷静で愛情ある指導だとばかり思っていた。私たちもすっかりだまされた、別府監督に。

聡 俺にだまされた。

美樹 市長と秘書室。地区の人、私やあなたの職場の人も口をそろえる。別府監督にだまされた。

聡 ふざけるな。俺がいつ誰をだました。ただ必死の俺をお前らが勝手に持ち上げてただけだろう。

美樹 ところがだまされたことになる。みんな、言い訳が欲しい。だからあなたも告白なんかしちゃいけない。良かれと思つて星野君にしたことがこういう結果になってしまい残念だ。それだけ言えば。

聡 いいのか。

美樹 いいの。こんなことになるなんて思ってたんだから。

聡 それはそうだな。

美樹 星野君が死んで、悲しいは悲しいで受け止めるけど、自分の言い分を崩しちやダメよ。

聡 …。

美樹 それはそれ、これはこれなの。よかれと思ってやったあなたを責められる人はいない。みんな、監督のサインを無視して好き勝手したら生きてゆけない世の中で生きてるんだから。文句言うならそうでない世の中を作ってから言えつてのよ。作れもしないものを求めてあなたを責めるのはおかしい。

聡 そういふもんな。

美樹 そうよ。私だけだって生活がある。あなたは工場で働いて、私はスーパでパートを続ける。こんなことではじき出されて潰れるわけにはいかないの。わかる。

聡 ああ。

美樹 ここで生きてゆくんだから。

電話が鳴る。

聡と美樹、顔を見合わせる。

聡、受話器をとる。

聡 (聞いて) はい。え。そうですか。はい。ええ。ええ。わかりました。

聡、電話を切る。

美樹 なんだって。

聡 星野君。亡くなった。

美樹、言葉がない。

聡 ちくしょう。

聡、テーブルを叩く。

美樹 あなた。

聡 わかってるよ。大会は予定通り行うから、スタジアムに子供たちを集めろって。

美樹 え。

聡 明日。

美樹 …。

聡 なに考えてるんだ、いったい。

美樹 誰が言ったの。

聡 近藤さんだよ、秘書室の。安心してください。悪いよ
うにはしません。これ以上悪いことがあるかよ。星野君
が死んだぞ。

美樹 …。

聡 悪いようにはしないって、どういう。

聡は言葉が続かない。美樹も。

朝日がのぼる。

蝉が鳴き始めた。

夏の朝。

溶暗。

五景

同日。夕方。

夕日がさしている。

別府家のリビング。

薄汚れてくたびれたユニフォームを着た聡が椅子
に座っている。

美樹は電話している。

美樹 そうなのよ。一回表でゲームセット。うちのチームの
攻撃だったんだけど、立たないよの、バッターボックスに、
二番の子が。一人目がバットひと振りもしないで三振。二番
の子がバット持ってベンチを出てバッターボックスに向か
う途中で立ったまま泣き出しちゃって。前にも進めず、後ろ
にも戻れない。それ見てチームの子たちが泣き出して、敵の
チームの子達まで。以外に泣き虫なのよね、男の子って。星
野君が二番だったんだって。そう。それで審判も困ってちゃ
ってね。うちの人がグラウンドに出て「いいです。今日は、
もう。うちの負けにしてください」って言って、「ゲームセ
ット」。それを言う審判も目、真っ赤にして声震わせてね。
それで私も泣いちゃって。客席から両チームに拍手。野球っ
ていいなあって、思っちゃった。あはは(笑う)、そうそう。
どうなることかと思ったんだけど、え、監督。うん。しゃべ
らない。いろいろ責任感じちゃってるみたいで。

聡、美樹をにらむ。

美樹 あ、にらんだ。いるの。目の前に。うん。伝える。(聡
に)丸山さんが「ご苦労様」って。

聡 …。

美樹 あはは（笑う）。黙ってる。でもね、

聡、いきなり電話機を美樹から奪う。

美樹 なにするのよ。

聡、電話機を床に投げる。

美樹、慌てて電話機を拾い、

美樹 ごめん。うん。ちょっと切るね。

美樹、電話を切って、テーブルに置く。

美樹 なんなのよ。丸山さん、心配してくれてるのに。

聡 お前もしたんだ、拍手。

美樹 え。

聡 拍手だよ。あの時。

美樹 したわよ。もちろん。よくやったって思ったから。

聡 誰が。

美樹 え。

聡 誰が良くやったんだ。

美樹 それは。あなたも子供たちも。

聡 よくなんかやってない。あんなひどい負け方があるか。

美樹 でも。試合しただけで立派よ、こんな時に。

聡 りっぱ。

美樹 心配してるのよ、みんな。丸山さんも、私も。

聡 噂話がしたいだけだ。

美樹 それもあるかもしれないけど、ホッとしたのよ、みんな。あなたが試合終了を決めて。つらいなか。歯を食いしばってみんなよくやってた。だから拍手が沸き起こった。泣いる人、たくさんいたわよ。

聡 原田もほっとしただろうな。

美樹 え。

聡 市長だよ。開会式に来ないで副市長にありきたりのスピーチさせてとんずらだ。

美樹 どうだっていいじゃない、原田なんか。

聡 よくない。

美樹 どうして。

聡 …。（言えない）

美樹 期待してたの。

聡 期待。

美樹 そう。

聡 …。

美樹 なに黙ってるのよ。

聡 お前どうして言わなかった。

美樹 なに。

聡 言わなかっただろ。今の電話で丸山さんに。

美樹 なによ。

聡 星野君が首を吊った理由。

美樹 …。

聡 話すならまずそれを話すべきだろう。肝心なのはそこな
んだから。

美樹 言えないわよ。

聡 どうして。

美樹 こんな話を別府さんの奥さんから聞いたんですけど
って、丸山さんが市役所のお偉方のアンチ原田の耳に入れた
らどうなると思う。

聡 え。

美樹 丸山さんはそういうことする人なのよ。密告っていう
か、情報提供っていうか、簡単に言えば告げ口。わかるでし
よ。市役所には反市長、反原田の一派がいて、原田に痛めつ
けられて冷や飯食べてる。そいつらにとって絶好のチャンス。

聡 星野君の自殺が。

美樹 そう。

聡 …。

美樹 あなたもうかつなこと言っちゃダメよ。原田かも反原
田からもいらまれてこの町にいられなくなる。今はおとなし
く市長の側にいればいいの。

聡 どうして俺が原田の側なんだ。

美樹 舞い上がったでしょ、市長と一緒に写真に写って広報
に載って。

聡 それは。こんなことになると思わなかったから。

美樹 あんなことしたからこんなことが起きたのよ。

聡 なに。

美樹 いやいや、そんなことないと思うけど、とにかく、し
かたないじゃない。もう、起きちゃったんだから。今からは
これ以上悪くならないようにことを運ぶ。

聡 これ以上悪くなる。

美樹 ええ。

聡 どういうことだ、これ以上って。

美樹 例えば。星野君のお父さん、まだ行方、わかんないんですよ。

聡 ああ。

美樹 死んでるかもしれないわよ、首吊って、後追い。

聡 …。

美樹 そうなればお母さんも。

聡 やめろよ。

美樹 ね。今のこの状況で言える、丸山さんに、あの話。

聡 …。

美樹 秘書室の近藤さんが胸に収めきれなかった話よ。私たちのところで止めないと。

聡 そうか。

美樹 原田、めちやくちや。

聡 …。

美樹 「明日は来賓席で市長の私の隣に座って試合を観ようね。別府監督のサインで君のチームメイトがバンドを決めたら拍手しようね」ってメッセージを書いてお父さんに持たせたんでしょ。そんなの嫌だって星野君がリビングを飛び出したからお父さんは腕をつかんで、「お父さんもお母さんも市長さんにお世話になってるんだ。市長さんの言いつけをききなさい。市長さんの隣になんか、そう簡単に座れないんだぞ。ありがとうございますと言って、おとなしく座れ」。ところが星野君はうんと言わない。お父さんは怒鳴った。「バンドのサインを無視するからこういう目に会うんだ。自分の責任だぞ」。星野君は言い返した。「別府さんが喜んでくれると思っただよ。お父さんと違って優しいし、試合に勝ったら、バンドのサインのことなんか気にしないで、よくやった星野君って頭をなでて抱え上げてくれると思っただよ」。お母さんはそれを聞いて驚いた、この子にそんな気持ちがあったのかって。お母さんからこの話を聞いた近藤さんも驚いた。

聡 驚いたよ、俺も。

美樹 でもお父さんはせせら笑った。「別府監督は優しくなれない。お前が明日市長さんの隣に座らなかつたら怒るに決まってる。まだわからんか」。星野君は言い返せなかつた。押し黙っている星野君をお父さんは殴った。顔を一発。胸ぐらをつかんでもう一発。星野君は部屋に入ってしまった。お母さんが呼んでも出てこない。

聡 子供を殴るような人じゃなかつたんだろ。

美樹 ええ。近藤さんも驚いてた。

聡 どうして。

美樹 市議員選挙のことがあるよ。

聡 え。

美樹 ここで市長に見離されたら選挙に出れない。

聡 …。

美樹 逆に有利でしょ。星野君が市長の原田に引き立てられて有名になれば、あああの二塁打の星野君のお父さんかって顔が売れて、選挙で票になる。

聡 まさか。

美樹 そんなもんよ、うちの選挙。ふだん殴らないお父さんが殴るんだからそのぐらいの理由がなきゃ。

聡 …。(確かにそうだと思う)

美樹 だから私はペラペラペラペラしゃべったりしません。そんなことしたら、星野君が自殺したのは市長とお父さんですって言いふらすようなもんでしょ。弱みを見せたら負けよ。

聡 弱み。

美樹 そう。うちの夫が理由じゃありませんって言いたいに違いないと勘繰られる。

聡 誰に。

美樹 例えば、丸山さん。

聡 心配がきいてあきれな。してないじゃないか、全然。

美樹 そんなもんよ。スーパのおばさまの付き合いなんて。

聡 くだらん。

美樹 もしかしてあなた、心配して欲しいの。

聡 …。

美樹 言い訳したい、この話で。悪いのは私じゃありません。

聡 まさか。

美樹 そうよね。

聡 ああ。

美樹 この話、どっちに転ぶかまだわからない。

美樹、黙り込む。

聡も黙る。うかつな一言は言えない。

美樹 でもなあ、星野君、思ってたのよ。別府さんは僕がバンドのサインを無視しても許してくれる。二塁打うったことをほめて抱え上げてくれる。

聡 ああ。

美樹 すごくくない。

聡 …。

美樹 星野君、好きだったのね、あなたのこと。たぶんわたしよりも純粹で大きかったと思うなあ、あなたを思う気持ち。

聡 …。

美樹 でもあなたは星野君の思うような人じゃなかった。

聡 …。

美樹 ね。

聡 わかってるよ、そんなこと。

美樹 星野君のお父さんは花作りと選挙で忙しい。市長ばかり見て僕を見てくれない。お父さんに恵まれない星野君はあなたこそが僕を見て気にかけてくれるんだと思いたかった。別府監督は僕と一緒に喜んで、泣いてくれる。何をしたらって見放さず、味方してくれると思いたかった。

聡 …。

美樹 バカね。子供って。かわいそう。本当に。

聡 わからんな。俺にはそういうの。

美樹 わからない。

聡 わかるような、わからんような。

美樹 わかりたくないのよ。子供の気持ち。

聡 …。

美樹 野球に夢中になるのは子供をだましていい思いをしたい人だけなのかもね。

聡 なに。

美樹 怒らないで。理解して、論理的に反論してね。

聡 いいよ、もう。

聡、黙る。

美樹も黙る。

聡が口を開く。

聡 社長と工場長、「野球をやめたらいかん。続ける」って、今日、俺に。

美樹 へえ。

聡 地区の人たちも、「野球続けてくれ」って。

美樹 みんな、夢中ね。

聡 ああ。

美樹 へんなの。

聡 俺にはよくわからん。星野君が死んで、まだ野球を続ける。しかも俺が監督で。

美樹 だから、みんな。

聡 今まで通りやれるか。どういう気持ちでサインを出したらしい、ベンチから、子供達に。

美樹 …。

聡 俺にはわからん。今日のあの拍手。何が何だか。何をどうしたらいいか。

美樹 やめる、野球。

聡 え。

美樹 やめてもいいよ。しばらく仕事も休んだら。

聡 いいのか。

美樹 いいよ。

聡 でもさ。

美樹 なに。

聡 ユニフォームの脱ぎ方がわからない。

美樹 え。

聡 どうやったら脱げる。

美樹 …。

聡 星野君に謝って、星野君に脱がしてもらわないと。

美樹 え。

聡 それが筋なんじゃないかな。

美樹 なに言ってるの。星野君は死んじゃったのよ。

聡 待ってたんだ星野君は、俺を。良く打った、二塁打。バンドのサインなんかどうでもいい。バッティングさんざん練習したもんな、内角低めもよく見て顎を引いてバットがボールの芯をとらえれば力はいらぬ、引っぱるな、センターに弾き返せ。練習で俺が口をすっぱくして言ったとおりのバッティングだったもんな。ああ、ちくしよう。ほめてやればよかったんだ。なのに俺がしたのは。俺が市長やお父さん、お母さんから星野君を守ってあげなくちゃいけなかった。ちくしよう。このユニフォームは脱げない。このユニフォームで俺と星野君はつながってるんだから。脱いじゃダメだ。脱ぐなら星野君に脱がしてもらわないと。

美樹 あなた。

聡 これを着た時、星野君はまだ生きていた。脱いだら星野君は本当に死んで、帰ってこない。

聡は黙り、うなだれる。

美樹 着てたらしいよ、気のすむまで。

聡 え。

美樹 でも今言ったことは外で言っちゃダメよ。自分で自分の首を絞めることになるんだから。わかるでしょ。あなたひとりのせいにされてしまう。

聡 …。

美樹 星野君は帰ってこない。謝っても届かないし、ユニフォームを着ても筋は通らない。ボタンを外しにくるわけないじゃない、星野君が。

聡 甘えるなっということか、これ以上、星野君に。

美樹 そう。ユニフォーム着たまま、ここで首吊ったりしないでよ。

聡 星野君にほんとに悪いことしちゃったな。

聡、黙る。

美樹も黙る。

聡、ユニフォームのボタンを外す。

聡 俺は死なないよ。本音をうかつにぶちまけたりもしない。

美樹 うん。

聡 言い訳はしない。市長の原田には絶対に近づかない。

美樹 (尋ねて) できる。

聡 できるよ。

美樹 工場に来るよ、原田、必ず。何かの式の来賓に招待されるかもしれない。お隣の席にどうぞって。

聡 行くもんか。

美樹 そう。(と言って、考え込む)

聡 どうした。

美樹 そこはまだ決めなくていい。

聡 え。

美樹 さっきも言ったでしょ、この話まだどっちに転ぶかわからない。原田の側にいるのがいいのか、離れたほうがいいのか。孤立しないためにはどうしたらいいのか。

聡 …。

美樹 じっとしていきましょう、今は。決めないで。

聡 いいのか。そんなんで。

美樹 損得も考えないと。星野君みたいに純粹には生きられない、こおで、私たち。

聡 …。

美樹 身を屈めて、精一杯、目立たない。

聡 わかった。

美樹 夕ご飯。買いに出ないわよ、今日。

聡 いらん。風呂だけあればいい。
美樹 そう。

聡、ユニフォームを脱ごうとして手を止め、

聡 今からでも星野君を抱え上げてみてえなあ。俺の足腰の立たなくなるまでグラウンドを一周でも二周でも三周でも。日が暮れて真っ暗になるまで走り続けて。

美樹 どうなるの。

聡 天国につれてってやる。

美樹 …。

聡 俺は地獄でいい。

聡、ユニフォームの上着を脱いでゴミ箱へ放り込み、浴室へ。

美樹 また、簡単に地獄でいいなんて言う。あのね。（浴室の聡に）いいわけないでしょ、地獄で。私たち、まだ生きてるんだから。

聡（声） ああ。

美樹 そうそう。あのね。黒田さんが昨日、へんな夢、見たんだって。いつも口すぼめて悲しそうな顔でめったに笑わない黒田さんがまじめな顔して言うのよ。「星野君の二墨打」っていうお話が載った教科書で道徳を教えている国がある。そのお話の中で、監督はやっぱり別府さんで、バンドのサインを無視して二墨打を打った星野君が出場停止にするんだって。同じでしょ。おかしいのはね、黒田さん、「星野君は死んでない、そっちの国に行ったんだ」って言うの。「別府監督になって生きてるんだ」って。わけわかんないでしょ。黒田さんの夢の中に「星野君の二墨打」で道徳を教える国があって、その教科書の中で星野君は別府監督になって生きて、あちこちの学校の道徳の授業で出場停止命令を出し続けているってことでしょ。つまりもしここが黒田さんの夢の中だったら、この国では「星野君の二墨打」が道徳の教科書に載っていて、あなたは元星野君の別府監督で、あなたのなかで星野君は生きてるってことよね。こんな夢、黒田さん、このタイミングで見るんだよ。今朝に。へんでしょ。ねえ、あなた。聞いている。

返事はない。

美樹、ゴミ箱を見る。

美樹 捨てちゃっていいの、これ。

美樹 、ゴミ箱からユニフォームを拾い上げる。
ユニフォームの背番号は「8」。

美樹 (見て) え。どうということ。(呼ぶ) あなた。

聡の返事はない。

美樹 ねえ、これ。どうということ。

美樹は浴室に近づこうとするが足がすくむ。
シャワーの音はしない。

ユニフォームを持ったまま動けない美樹。
溶暗。

終

参考文献

「星野君の二塁打」 小学校六年道徳教科書 学校図書

「魂の殺人」 アリスミラー 新曜社

「政治の世界」 丸山真男 岩波文庫